



怠惰は知識を救うか？

—— 懐疑論・認識論的文脈主義・主体敏感の不变主義 ——

横路 佳幸・杉野 雄飛

1.

いま、大学生マク某(McX)は認識論の講義に出席しているのだとしよう。そこで、教授が以下のような仮説を紹介する。

「ある人(あなた自身と考えてもよい)が邪悪な科学者による手術を受けたと想像せよ。その人の脳(あなたの脳)は身体からとりはずされ、脳を生かしておくための培養液のはいつた水槽に入れられている。神経の末端は超科学的コンピュータに接続され、そのコンピュータによって、脳のもちぬしはすべてがまったく平常通りだという幻想をもたされる。人々も、いろいろな対象も、大空や大地も、みなあるように思われる。しかし本当は、そのひと(あなた)が経験していることはみな、コンピュータから神経末端に伝わる電子工学的インパルスの結果なのだ。そのコンピュータは非常に賢くて、あなたが手をあげようとすると、あなたは自分が手を上げているのを「見」たり、「感」じたりすることになる!」

続けて、教授は次のように言う。

「君は自分が水槽の中の脳に過ぎない可能性を否定できるかね。たしかに、君はいま手を持つことを知っていると言うかもしれない。実際に手を上げようと思えば、手が上がった感覚を感じ、上がった手を見ることができるだろう。だが、君が水槽の中の脳に過ぎないという可能性と、そうした感覚的な経験は矛盾しない。君の『手を持っている感覚』は、電子工学的なインパルスの結果に過ぎないかもしれないからだ。したがって、君は以下のような推論による帰結を受け入れねばならない。

(P1) 私はBIV(brain-in-a-vat; 水槽の中の脳)ではないことを知らない

(P2) もし私がBIVではないことを知らないならば、私は手を持っていることを知らない

(C) 私は手を持っていることを知らない

君は(P1)を否定できないのであった。(P2)も君は拒否したくないだろう。知識は通常、知られていることの含意関係のもとでは閉じられているからだ²。すると、君は(C)も認めなければならない。つまり、君は手を持っていることを知っているつもりだろうが、それは実際には誤りなのだ。」

懐疑論(skeptical argument)と伝統的に呼ばれてきたこの議論は、誰にとっても到底信じがたいものと映るに違いない。マク某は普段、手を持っていることのみならず、様々なことを知っているはずである。いま椅子に座っていること、この地球上に水が存在していることなど、彼女は外的事物の存在に関する様々な知識を持つ。しかし、いったん(P1)と(P2)を認めると、マク某は手を持っていることだけではなく、日常的命題の多くも失うことになってしまいかねない。というのも、(P2)の後件は容易に一般化されうるからである³。すると、彼女は現実のほとんどの事態について無知であるという帰結が導かれる。これは非常にゆゆしき事態である。単に BIV の仮説を認めただけで、知っているはずの多くの知識が我々の手から零れ落ちてしまうと言われて、誰が信じるだろうか。つまり、上述の懐疑論者が提出する問題とは、(P1)および(P2)が真であることを認めた途端、我々の直観に反する点で明らかに偽であるはずの(C)が導出されてしまい、さらに経験的知識のほとんどが破壊されるという困難が引き起こされるということなのである。

また、懐疑論が我々に課す問題は、その議論の真偽に関わるものだけではない。仮に我々が懐疑論を偽とみなすことに成功したとしよう。しかしそれでも、(P1)および(P2)から(C)を導くという懐疑論の論証自体には、我々をひきつける説得力があるように思われる。もちろんこの説得力は我々の犯す誤謬に基づくものかもしれないが、この一見すると正しく思われる誤謬は決して単なる誤謬と同じではない。懐疑論の持つ議論の力強さによって、我々は「私は手を持っていることを知っている」というありふれた直観と、「懐疑論の論証が妥当であるように見える」というもう一つの直観とが衝突する理由を説明する必要がある。言い換えれば、懐疑論は、単に偽とみなすことができれば解決として十分というわけではなく、「なぜ懐疑論が説得力を持つように見えるのか」についても説明を要求する論証なのである。

懐疑論は、認識論の分野において最も重大な問題の一つとされる。だが、その議論に決着をつけることは本稿の目的ではない。また、近年その支持者を拡大し、懐疑論を解決しつつもその説得性にも説明を与えうるとみなされる「認識論的文脈主義(Epistemic Contextualism; EC)⁴」と「主体敏感的不変主義(Subject-Sensitive Invariantism; SSI)⁵」の二つの立場のどちらがより優れた解決を与えているかということも検討しない。我々はECとSSIに関して、それらの差異を確認しつつ、懐疑論に対する両者の応答の類似点を明確にするのみである。むしろ、本稿において我々が目的としたいのは、これら二つの立場によって一見解決されたかに見える懐疑論が、真正の懐疑論者を満足させるものではないことを示

すことである。我々の考えによれば、EC と SSI 論者が解いたかに見える懐疑論は、ドグマティックな前提に基づいたものであるため、真正の懐疑論者にとって彼らの解決はまったく十分ではない。したがって、懐疑論者が望むと思われる結論に対して、二つの立場は各々単独では決して有効ではないと我々は主張する。もちろん我々の主張は、懐疑論を本当に乗り越えるためには、どのような立場をとることが見込みあるのかという問題とも関わるだろう。しかし、本稿ではその問題に関しては触れるに止めたい。我々の目的はあくまで、EC と SSI による懐疑論解決の射程を明らかにすることだからである。もし懐疑論を認識論において最も重大な問題の一つとみなすならば、本稿の結論が認識論において担う役割は、決して小さくないように思われる。

本稿の構成は次から成る。第2節で我々は、懐疑論を解決に導く糸口として、普段行われる知識帰属に関する特徴を確認する。日常的な場面に立ち返ることによって、伝統的な知識帰属の態度に対して互いに異なった修正を加える二つの立場、すなわち EC と SSI の二つが知識帰属に関する立場として提案される。両者はともに懐疑論に対して独自の解決策を持っている。そのため、まず第3節では EC の主張を確認しながら、その解決策を考察する。続く第4節でも、EC に対する代替案として登場した SSI の主張を確認しながら、その解決策を考察する。これらの考察を通して、第5節で明らかになるのは次のことである。すなわち、懐疑論に対してその説得性を残したまま解決を与えると一見思われる EC と SSI では、真正の懐疑論者が引き出したい結論を棄却することができないということである。第6節では、EC と SSI の目指した解決とは何であったかが整理され、懐疑論解決において必要な立場およびその説得性に関する示唆が提示される。

2.

我々が本稿で目指すのは、EC と SSI の検討を通じて、両者が懐疑論をどのように解決しているのかを考察することである。その目的のため、いまは(P1)と(P2)を端的に偽とみなし拒否する選択肢を排除しておこう。そうすると、マク某が懐疑論解決を目指して見直すべきものは、懐疑論の論証そのものではない⁶。というのも、それは明らかに妥当な推論によって成立しているからである。では、懐疑論者を取り取る教授によって日常的知識に関する問題を提起されたマク某は、いったい何を見直すべきなのだろうか。

おそらく懐疑論者を牽制するための最も見込みある対策は、知識に対する我々の態度を見直すことである。実際のところ、我々は知識——正確には「 S は P を知っている」という形式を持つ知識帰属(knowledge attribution)⁷だが——に対して非常に柔軟な態度をとっている。そこで、我々の直観に適合する形で認識論的主張を展開するには、こうした「知識」に関する日常的な事実を直接、知識の理論のうちに織り込んでしまえばよいと考えるのは、ごく自然な発想だろう。知識に対して常に厳しい規準が課され、それが満たされない知識ではないという考えは、実践的な現場を背景とした実情からかけ離れている。次のような例を考えれば、我々の知識に対する態度の柔軟性を理解することができる⁸。たと

えば、いま先生が六人の子どもたちに六冊の本を手渡し、ランダムに一冊ずつ取るよう各々に指示したとする——ただし、このうち五冊にはオーストリアの首都について誤った情報がある、一冊には正しい情報が掲載されている。先生は、首都に詳しくない子どもたちに、各々が選んだ本に就いてオーストリアの首都がどこかを調べるように言った。すると、子どもたちは順番に「ベルグラード」、「リスボン」、「ウィーン」などと返答した。そこで、こうした一連の出来事を眺めていた私に向かって、先生は次のように尋ねる。「オーストリアの首都を知っているのはどの子ですか。」

普通、こうしたケースを目の前にすると、多くのひとは『ウィーン』と答えた子どもが、オーストリアの首都がどこであるかを知っている」と答えるように思われる。私が実際にそう答えたとしても、何も奇妙な点はない。しかし、「ウィーン」と答えた子どもは運よく正しい答えを得たにすぎない。もし他の本を手にしていたら、その子どもは誤った信念を形成していただろう。幸運だけを頼りにして得た答えを含む信念は、仮に真になるにせよ、厳密に言えば知識とみなすことができないはずである⁹。だとしても、そのとき「誰もオーストラリアの首都がどこかを知らない」と言ってしまうことに、我々は躊躇いがある。どうしてだろうか。おそらくそれは、我々が主体に知識を帰属する際、しばしばルーズな態度をとるからである。特にこの例においては、「知る」という語に関する規準が非常に低くなっており、その規準が満たされるためにその子どもは知識を持つとみなされるのである。これは、我々が遭遇する場面によって、知識を帰属するための規準が何らかの仕方に変化しうることを示唆するだろう。

知識帰属を行う際の規準が常に厳密であるわけではないという日常的な事実、懐疑論を解決するための足掛かりを提供してくれる。だが不幸なことに、認識論の分野で EC(認識的文脈主義)および SSI(主体敏感的不変主義)が華々しく登場するまで支配的だった見解は、我々の日常的で実的な場面における知識帰属を積極的に反映させたものではなかった。伝統的に、多くの認識論者は主に次の——古典的な不変主義(Classical Invariantism; CI)と呼ばれる——立場に暗にコミットしていたとされる。

(CI) (1) 知識帰属文の真理条件は、いかなる会話の文脈においても不変的(invariant)であり、かつ

(2) 知識は実践的な(practical)事実には依存しない

(1)はいわゆる「不変主義(invariantism)」という立場を、(2)はいわゆる「純粋主義(purism)¹⁰」という立場を表している。簡略になるが、順に(1)と(2)を確認しておこう。まず不変主義者は、知識主体 S の状況が与えられれば、知識帰属がなされる会話の文脈に関係なく、 S が「知っている」かどうかについての一つの規準の集合が存在すると主張する。不変主義によれば、「知る」という語は「単一の不変的な意味論的値を持つとされ、発話の

真理条件に対する『知る』という語の貢献は、発話トークンごとに一定である¹¹⁾とされる。言い換えれば、特定の文脈 c における「 S は P を知っている」という文と、文脈 c' における「 S は P を知っている」という文が表す命題はそれぞれ、いかなる文脈において発話されたとしても——言語哲学的に言えば、いかなる使用の文脈(context of use)においても——変動しないと不変主義者はみなす。不変主義に「不変」という名が付けられているのは、こうした理由のためである。

次に、(2)によって特徴づけられる純粹主義に移ろう。純粹主義は、次の主張にコミットするとされる。

(PU) あらゆる主体 S_1 と S_2 に対して、もし S_1 と S_2 が命題 P に関する認識的立場の強さの点でほとんど類似しているならば、 S_1 と S_2 は、 P を知っている立場にあるかどうかにおいてもほとんど類似している¹²⁾

(PU)によれば、 S が P を知っているかどうかを決定するのは、証拠(evidence)や信頼性(reliability)、安全性(safety)、敏感性(sensitivity)などに代表される P の真理に関わるような(truth-relevant)要因によって特徴づけられる、認識的立場の強さ(strength of epistemic position)だけである。たとえば、 P に反するような可能性が主体にとってどれほど重要なのかといった実践的な側面を、純粹主義者は真なる信念を知識たらしめる要因として認めない。したがって、証拠や信頼性などにおいてはまったく変わらないが、実践的事実に関してだけ異なるケースに現れる二つの知識帰属文トークンは、純粹主義に従えば、異なる真理値を持ちえない。(PU)は、知る立場にあるということが、真理に関連する要因にスーパーヴィーンする(supervene)ことを述べるテーゼなのである。

さて、冒頭の懐疑論のケースに戻ろう。認識論の教室の中でマク某はいま、懐疑論の脅威——それは我々の日常的な知識のほとんどを破壊する苦境をもたらす——に晒されているのだった。もしマク某が(P1)と(P2)を受け入れ、かつ(CI)における(1)と(2)の両方を前提としたとすると、彼女は懐疑論の餌食になるのを待つだけである。(1)によってマク某は、いかなる使用の文脈においても「知る」が同じ意味論的値を持つことを認め、(2)によって彼女は、知識主体が知っているかどうかについて、それが証拠や信頼性といった命題の真理に関わる要因だけに依存すると認めなければならない。すると、主体 S がある命題 P を知るために、 S は P にとって関連する代替可能性(relevant alternative)をすべて排除せねばならないとすると、BIV である可能性をマク某は決して排除できないのだから、そこでいかなる証拠を持ち込んだとしても、マク某は日常的な事物に関する命題——たとえば彼女が手を持っていること——を知るわけではない¹³⁾。くわえて、知識を持つとみなされる規準も固定されるため、いかなる会話の文脈においても、すべての代替可能性を排除することを要求する規準がマク某の知識帰属文に課せられてしまう。つまり、BIVの可能性が排除されない限り、「マク某は P を知っている」という知識帰属文が真、または彼女が日

常的な命題に関する知識を持つことは常に不可能である。そのため、(1)と(2)の両者を認めると、マク某は懷疑論に屈する——日常的な知識帰属文の表す命題が決して真にならない——ことを余儀なくされてしまうだろう¹⁴。

とはいえ、心配には及ばない。その理由は、先に見たように、日常的な知識帰属の実態を検討することで(CI)への疑問がすでに浮かび上がっているからである。言い換えれば、知識への我々の態度はしばしば、(CI)と齟齬を来す。そこで、もし懷疑論的帰結を認めることに抵抗があるならば、マク某は(CI)を構成する(1)か(2)のうち、いずれかを拒否する必要があるだろう。懷疑論に解決を与えるとみなされる二つの立場、すなわち EC と SSI を区別する分水嶺もまた、ここで(1)と(2)のどちらを拒否するのかという点にあると見ることができる。

一般的に言えば、EC は(1)を否定し、SSI は(1)を受け入れながら(2)を否定する¹⁵。この違いは次のように表現してもよい。すなわち、EC によれば、「*S*は*P*を知っている」という知識帰属文の真理条件の決定が、その文を帰属する話者の文脈による変化を反映した規準によってなされるが、他方で SSI によれば、その真理値の決定は *S* の実践的な要因による変化を反映した規準によってなされるということである。EC と SSI は、その主張内容のみならず、擁護される動機も互いに大きく異なっているが¹⁶、懷疑論の解決において似たような提案をする点に限って言えば、両者の間にそれほど大きな差異があるわけではない。以下では、(CI)における(1)もしくは(2)を拒否するこの二つの立場を確認しながら、両者が懷疑論の解決にどのような解決を与えるのかに焦点を絞ることにしたい。

3.

まず(1)を拒否する EC による主張を簡単に確認しておく。それは次のようなものである。

(EC) 知識を帰属する文の真理条件は、その文が発話される文脈に従って変化する

ここで注意すべき点が二つある。一つは、知識帰属文の真理条件もしくはその文が表す命題の変動と、その文の真理値の変動は互いに区別されねばならないということである¹⁷。たしかに、真理条件が変動することで、真理値もまたときに変化しうる。だが、真理値の変化を引き起こす要因は、真理条件もしくは命題の変化ではなく、直接的には(CI)における(2)といった真理に関連するようなもの、たとえば証拠や信頼性、敏感性である¹⁸。真理値の変化を許すような主張は、(EC)というテーゼのうちにはまったく含まれていない。これは、(EC)という立場そのものが知識そのものではなく、知識帰属文を扱うという点で言語的もしくは意味論的な見解であることに由来する。(EC)は、あくまで知識帰属文の真理条件が文脈によって変動しうることを主張するような、「知る」という語に関わる立場なのである¹⁹。

(EC)を理解する際のもう一つの注意すべき点は、「文脈(context)」に関わる。(EC)によれば、真理条件が変動するのは、主体が属する状況や環境ではなく、知識帰属者(*attributor*)の会話の文脈においてである。これを先ほどの例を使って見ておこう。いま問題となるのは、次の問いである。すなわち、『ウィーン』と答えた子どもはオーストリアの首都がどこであるかを知っている」と私が言うとき、それは真なる命題を述べているのだろうか。(EC)に従い、その文の真理条件が、知識帰属者である私が立つ会話の文脈に依存するのだとすれば、先の例では私は真なることを述べたと言ってよいだろう。というのも、私と先生の会話に含まれる「目的、意図、期待、前提²⁰」などを考慮すれば、ある子どもが知識を持つとみなされるための規準は、いまの文脈では明らかに低くなっているからである。しかし、もし私がその後、たとえば認識論の講義に出席することになったとすれば、事情は異なる。哲学的なディスカッションが行われる中で、私が「ウィーン」と答えた子どもに対する先と同じ知識帰属文を発した場合、もはやその文は真とならないかもしれない。というのも、講義に出席するまでは考えなかった可能性が、いまや話者である私に際立つ(salient)ものとして現われ、その結果、更新されたいまの哲学的文脈は、知識を持つとみなすための厳しい規準を課す——認識論の教室では「知る」という語をルーズな規準に従って使用すると、手痛い反論に遭遇することだろう——ものに変動しているからである。このとき真理条件の変動に、「ウィーン」と答えた子どもの当時置かれていた状況は直接的には関係しない²¹。重要なのは、『ウィーン』と答えた子どもはオーストリアの首都がどこであるかを知っている」と私が言うとき、先の例のような文脈においては緩い規準が課されるために真たりうるが、もしその文が哲学的もしくは非日常的な文脈で発せられたとすると、厳しい規準が課されるために偽になりうるということである。このように、(EC)によれば、知識とみなされるための規準、もしくは知識帰属文の命題の変化を引き起こすのは、知識主体にとっての認識的な状況ではなく、その文を帰属するひとにとって何が際立つ可能性として現われているのかということ、つまりその帰属者が参加する会話の文脈の変動なのである²²。

では、本題に移ろう。冒頭の懐疑論に対して、EC 論者はどのような解決を与えるのだろうか。(EC)をとる利点は何よりもまず、日常的な我々の直観を正確に捉えることができる点だが、(EC)を擁護する者はそれと類比的な仕方では懐疑論を解決できると主張する。大ざっぱに言えば、EC 論者は懐疑論に次のような解決を与える。すなわち、(P1)の発話が真なる命題を表現できるのは、その文が発話される会話の文脈によって極端に厳しい規準が課せられる場合に限られるため、比較的緩い規準を課することが多い日常的なケースにおいては、(P1)の発話は偽なる命題を表現しうる真理条件を持つにすぎない。たとえば、認識論の講義が終わった後、マク某は哲学などまったく関わりがない友人とランチをとともにしたとしよう。懐疑論者である教授との会話における帰属とは異なり、日常的な文脈において「マク某は自分が BIV ではないことを知っている」という知識帰属文が表す命題は明

らかに真である。友人とマク某との会話の中では、その帰属文が表す命題に反するような可能性は言及されず、その可能性が帰属者である私に際立つことはないからである。つまり、友人との会話は知識とみなすための緩い規準を課すのみである。したがって、たしかにデカルトの悪霊や BIV といった突飛な可能性が言及される哲学的文脈は、知識帰属に関する規準を厳しいものに変動させるが、そうした厳しい文脈に知識帰属者が置かれるのは稀である。認識論の問題など考えなくてもよいような日常的な文脈にマク某が置かれる限りは、彼女が「私は BIV ではないことを知らない」と言うとき、その命題すなわち(P1)は偽たりうる。言い換えれば、緩い規準を課す文脈では「知る」という語が、厳しい規準を課す文脈と比較して弱い認識的關係を表現するので、マク某には BIV ではないことを知っているとみなしてもよいような規準しか課されていないのである。もし認識論の教室では真だった(P1)が、友人とランチをする文脈に移ると偽とみなされるのだとすれば²²、もはや「マク某は手を持っていることを知らない」という文が表す命題すなわち(C)もまた真ではないことになるだろう。EC 論者はそのようにして、「非哲学的な文脈で通常、話者が『知識』とみなすものを、他の文脈では彼らは『知識』とみなすのを否定する²⁴」ことで、(C)および日常的な知識を危険に晒すことなく懐疑論に解決を与えようとする。

さらに(EC)を援用した懐疑論解決は、単に日常的知識をその脅威から守るだけではない。EC 論者が強調するのは、「我々の知ることに関する主張は、懐疑論者による一見強力に見える攻撃から安全に守られようと同時に懐疑論の説得性(persuasiveness)も説明される²⁵」ことである。(EC)は、懐疑論者による論証そのものを否定するというよりも、むしろその論証に含まれる「知る」という語が持つ文脈敏感性(context-sensitivity)を主張するのみである。その言語的な特徴によって厳しい規準が課されるような文脈においてのみ、懐疑論的論証が妥当となるという観点から見れば、懐疑論は説得的だと EC 論者はみなすことができる。したがって、懐疑論を我々が論じる際に注意せねばならないのは、緩い規準を課す文脈と、厳しい規準を課す文脈における知識帰属文の真理条件を安易に同一とみなさないことである²⁶。これを混同すると、我々の日常的知識全般は懐疑論の脅威から逃れることができないという憂き目に遭う。EC 論者にとって選択可能な最もよい方法は、特定の文脈の中に懐疑論者を押し込むことで、その説得性を保持しながらも、外的事物に関する日常的な知識を決して否定しないことなのである。

しかし、(EC)による解決の代償は大きい。というのも、(CI)における(1)を拒否すると、我々の直観に反するケースが多々生じるからである。シフアーは(EC)を非難して、「知る」という語の文脈敏感性について次のように述べている。「普通のひとは誰も、自分が意味したものや暗に言明していたものが、自分はこれこれの規準に相対的にPを知っているのだ、ということをおあなたに言っているとは夢にも思わないだろう。²⁷」たしかに、「知る」という語はときに文脈敏感性であるかのような言語的働きをすることがある。EC 論者はそこで、「知る」という語を「ここ」や「いま」といった指標詞(indexicals)、もしくは「平ら」や「高い」といった段階的形容詞(gradable adjectives)と類比的に扱おうとする²⁸。だが、

「知る」という語が文脈敏感的だとは見えない証拠は、我々が「夢にも思わない」だけではない。「平ら」または「ここ」と「知る」の間には、行為に関する明確な違いがある。次のマクファーレンによる反論はおそらく強力である。

[知識を持つとみなされるべき規準が上げられたとき、]私は(...) [自身による過去の知識帰属文]が偽だと言うだけではないだろう。私はそれを偽として扱うのである。もっと言えば、(...)私は自分の以前の主張を撤回するだろう。私は、いつ他者が知識主張を撤回するべきかに関する相互的な期待を持っている。もし昨日サリーが「私は時間通りにバスが来ることを知っているわ」と主張し、今日バスが時間通りに来ることを昨日知らなかったと彼女が認めれば、彼女が自身による以前の主張を撤回すると私は期待するだろう。そこで、もし彼女が自身による主張が真だったと答えたとすれば、仮に彼女が「昨日適用されていた規準によってだけだね」と付け加えたとしても、そのことは私にとって極めて奇妙に映るに違いない²⁹。

さらに、(EC)によれば、認識論の教室の中でマク某が「私は手を持っていることを知らない」と述べる場合と、ランチの席でマク某が「私は手を持っていることを知らない」と述べる場合では、真理条件が変動するため、両者の文が表す命題は異なることになる。これもまた、いくぶん奇妙な帰結である。指標詞を含むような文でなければ、「マク某は手を持っていることを知らない」という文は、いかなる使用の文脈においても同一の命題を表現すると普通我々は考えている。でなければ、「マク某が手を持っていることを知っているのだろうか」と問うとき、懐疑論者とそうでない者の間では異なった命題について論じられていることになるだろう。つまり(EC)は、知識を持つことに関する論争を空虚にしてしまいかねないのである³⁰。

EC 論者はこのように様々な問題を抱えている。次節では、(EC)へのコミットメントを避けながら、その理論的利点を可能な限り残す立場として登場した SSI を検討する。

4.

(EC)は懐疑論に対して鮮やかな解決を与える代わりに、不変主義のテーゼである(1)を諦めるよう提案した。だが、(1)を諦めると、先に見たように我々の直観と反目する場合がある。そのため、(1)を守りながら懐疑論をうまく説明するには、(2)のみを否定するのが見込みある選択肢だろう。SSI を擁護する者はまさに(2)の否定、すなわち純粋主義のテーゼである(PU)の拒否によって、(EC)を乗り越え、認識論の問題に解決を与えようとする。

混乱を避けるため、いま一度(EC)と SSI の争点を整理しておこう。それは、ある命題 P を主体 S が知っているかどうかを考える際、 P の誤りの可能性が、帰属者にとって際立っているのか、それとも S にとって際立っているのかのどちらが正しいかという点である。

(EC)は前者をとるが、SSIは後者をとる。さらにSSIは、主体にとっての重要性という実践的な要因を考慮に入れることで、(PU)よりさらに具体的に次のように主張する。

(SSI) 主体 S が P を知っているかどうかは、 S が P について誤っている可能性に関する実践的な重要性に依存する。その重要性が高ければ高いほど、 S が P を知っているのに求められる規準も厳しくなる³¹

(EC)は、「知る」という語が文脈敏感であるという主張に止まる点で意味論的な立場であるが、(SSI)は知識そのものに関する(形而上学的な)主張である。なぜなら、主体が知識を持っているかどうかを決定するのに寄与する要因として、証拠や信頼性などのみならず、主体の置かれている状況が持つ真理に関わらない性質をも SSI 論者は認めるからである。つまり、(SSI)は意味論的には中立な立場を保持しながら、知識帰属文の真理値、および主体が本当に知識を持つかどうかという認識論の問題に積極的に関与する理論でありうる。また、(SSI)は(CI)における(1)を否定しないため、主体に関する客観的および実践的狀況——言語哲学的に言えば、値踏みの状況(circumstances of evaluation)——さえ確定すれば、「知る」という語を含む知識帰属文の真理条件もまた固定される。したがって、(SSI)によれば「(...)主体の実践的な状況に敏感であるような、明瞭な意味を持つ(univocal)知識関係が存在する³²」ことになる。SSI 論者はこうした点を(EC)にはない理論的な利益とみなす。

では(SSI)は懐疑論にどのような解決をもたらすのだろうか。BIV の仮説の前に、それほど突飛でないケース、たとえば巨大な隕石が来週地球に衝突する可能性を考えてみよう³³。もし私がこうした可能性に基づく知識を獲得したならば、私はきっとダイエットをするのを辞めるか、もしくは急いで家族のもとへ駆けつけるだろう。この意味で、知識と行為は密接に結びついている³⁴。とはいえ、日常的な場面においては、このような可能性を考慮に入れる必要はまったくない。なぜなら、巨大な隕石が来週地球に衝突する可能性は——天文学者と比べて——一般的な人々にとって極めて低いからである。スタンリーによれば、意志決定の際、主体が合理的に考慮すべき命題に対する代替可能性が存在するならば、ある命題は主体にとって深刻な実践的問題(serious practical question)となる³⁵。言い換えれば、信頼性や信念の感性にくわえて、主体 S にとってどれほど問題となっているか(*how much is at stake for S*)が、知識の獲得に関係するのである。もしこの主張に従うなら、巨大な隕石が来週地球に衝突する代替可能性を、普段主体は——ハリウッド映画を見た直後などという特殊な状況でない限り——考慮する必要がないのだから、主体にとってその命題は深刻な実践的問題とはならず、主体の持つ知識は損なわれずに済む。一般化して言えば、(SSI)によれば、もし主体 S が命題 P を知るのならば、 S が P について誤っているという可能性は、 S の実践的な目的——たとえば意志決定——を考慮に入れたうえで、無視されうるのである。明日カクテルパーティーが開催されることについての私の知識は、大きな天災が起こるごくわずかな可能性によって妨げられるわけでは決してない。

懐疑論に対しても SSI 論者は同様の応答をすることができる。マク某が BIV である可能性はすこぶる低い。おそらく BIV の仮説は、隕石衝突よりもさらに、マク某にとって問題とはならない。とすると、あなたの実践的な目的、たとえばカクテルパーティーに行く際に考えなければならない代替可能性——開催場所や時間の変更——さえ考慮に入れば、懐疑論的な仮説は適切に無視されるはずである。そのとき、あなたの日常的な知識はまったく危機に晒されることがない。それと同様に、哲学的もしくは非日常的な環境に主体がいるのでない限り、(SSI)によれば、マク某が BIV であることは深刻な実践的問題ではないため、知識を持つための高くない規準を彼女は満たしうるのである。したがって、主体の実践的な要因によって、日常的な場面における(P1)は偽なる命題を表すと SSI 論者は主張することができる。

だが、マク某が真面目な学生である限り、認識論の教室で懐疑論者たる教授を論駁できないことは、彼女にとって非常に重大な問題となるかもしれない。つまり、このとき彼女が BIV である可能性は深刻な実践的問題となりうる。それゆえ、BIV の仮説によって、マク某は手を持っていることについて誤る可能性を無視できない実践的状況に置かれるため、彼女は手を持っていることを知らないはずである。これは、懐疑論の結論、すなわち日常的な知識が破壊されるのを引き受けることに他ならない。そのため、BIV の仮説を考えねばならないような深刻な実践的問題がマク某に現れるときは常に、手を持っているという知識、ひいては外的な事物の存在に関する知識を彼女は持たないとされてしまう。しかし、そこでマク某が日常的な命題を知らないのだとしても、他方で、実践的な重要性のうちに BIV の可能性が含まれない日常的な場面においては、マク某が知るための規準は引き下げられる。そのとき彼女が知識を持つという事実を矛盾とみなすことは、主体にとっての重要性や彼女の実践的関心の変化による知識への影響を無視した誤りである。(SSI)によれば、前段落の主張といまの段落の主張は互いに矛盾するものではない。

かくして、(SSI)は懐疑論に対して解決を与えることができているように思われるが、それと同時に(CI)における(1)を認める SSI 論者は少々奇妙な帰結も導き出してしまう。それはたとえば、次のような一文である。

(?) 一般的な人々は日常的な命題 P ——たとえば手を持っていること——を知っているが、優秀な認識論者(epistemologists)は P を知らない³⁶

(?)は極めて直観に反することを述べている。だが、(SSI)——(EC)ではなく——に従うと、(?)は真となってしまう。SSI 論者は、一般的な人々の実践的な関心・目的を考慮したうえで、BIV の仮説を深刻な実践的問題ではないと主張する。よって、一般的な人々が P を知るために課される規準は、そこまで厳しいものとはならないだろう。他方、優秀な認識論者はその限りではない。BIV の仮説を反駁することは、彼らにとって非常に深刻な問題である。それゆえ、懐疑論の脅威に晒される認識論者に対して課される規準は非常に厳しく、

それを満たすことはほとんど不可能だろう。したがって、一般の人々と認識論者という双方の主体にとっての実践的な問題の違いが、彼らが知っているかどうかに直接影響することを認める SSI 論者は、(?)を真とせざるをえないのである。だが(SSI)と異なり、先にその言語的主張のために批判された(EC)はこうした問題に悩まされることがない。(EC)を主張するとき注目されるのは、主体の状況ではなく、帰属者の会話の文脈だった。そのため、(?)といった知識帰属が行われるような会話の文脈は、帰属者である話者に対して緩い規準か厳しい規準のどちらかを課すのみである。冒頭の例のように、懷疑論について議論されるような文脈の中にいる際に話者が(?)を発話する場合は、第一連言肢を偽とする点で(?)は偽であるし、友人とランチを楽しむような文脈の中にいる際に話者が(?)を発話する場合は、第二連言肢を偽とする点で(?)は偽である。そのため、いずれにせよ EC 論者は(?)を偽とみなすことができる。(EC)と(SSI)はこうして、(?)への態度の違いによって明確に区別される——そしてこの対応においては、(SSI)よりも(ES)の方に分があるように見える。

とはいえ、(SSI)の主張は懷疑論を解決すると同時にその説得性を説明できている点で、(EC)による解決と類似していると言ってよいだろう³⁷。(SSI)によれば、懷疑論解決は、主体が属する環境または実践の状況が日常的なものである限りにおいてなされ、その説得性は、それらが哲学的もしくは非日常的なものである限りにおいて説明される。こうした立場が(EC)と類似しているのは、両者とも(P1)のある場面においては偽を表す命題だとみなす点である。懷疑論が我々の日常的な知識を脅かすことはないが、かといってそこで誤った前提が用いられていたわけではないと EC と SSI 論者はともに主張できる。彼らは、(P1)を次のときに限り端的に真とみなすからである。すなわち、(EC)によれば、会話の文脈が真理帰属文の真理条件に関して厳しい規準を設けるときであり、他方(SSI)によれば、主体の実践的な目的の中に極めて低い可能性も考慮せねばならない事情を含めるときである。つまり、知識を帰属する者であろうと知識主体であろうと、いずれの立場にとっても代替可能性が際立つこと(salience of alternatives)が知識帰属文の真理条件もしくは真理値に影響を与えるのである。それゆえ、EC と SSI 論者によって擁護されるのは、懷疑論の成立不可能性ではなく、懷疑論のうちに含まれる「知る」という語の文脈敏感性のため、もしくは知るという関係の成立に関わる実践的な要因のために、代替可能性が際立つことがない日常的な場面においては懷疑論が成立しないこと、そして代替可能性が際立つ非日常的な場面において懷疑論が説得的であるという解決策なのである。

5.

ここまで EC と SSI 論者による懷疑論の解決を我々は見てきた。それは懷疑論の説得性を説明しつつ、外的な事物の存在に関する日常的な知識を担保する道だった。では、果たして懷疑論者はこうした解決に対してどのような応答をするのだろうか。

たしかに、日常的な文脈——これ以降「文脈」を会話の文脈や主体の関心も含む広い意味で使用する——では、「マク某は手を持っていることを知っている」という知識帰属文の

表す命題が真である点で、懐疑論者は日常的な知識を破壊するのに成功していないように見える。もし懐疑論者の目的が、外的事物に関する我々の日常的な知識を破壊することとしたら、彼らの目的は(EC)もしくは(SSI)を受け入れる限り、決して果たされないだろう。伝統的な(CI)という立場では解くことが困難であった問題に、EC と SSI 論者は新たな視点で解決を与えているのである。しかし、こうした解決策に懐疑論者はもしかすると次のように反論するかもしれない。

「なるほど、日常的な文脈にいる——たとえば友人と雑談している——間に君が『自分は手を持っている』と言うのならば、その知識帰属文は真かもしれない。だが、懐疑論の教室で BIV の仮説を君が真面目に受け取る限り、「君は手を持っている」という文は偽である。我々懐疑論者が主張しているのは、いかなる文脈においても知識帰属文が偽だということではない。むしろ、BIV の仮説が提出される哲学的文脈においては懐疑論が成立するために日常的知識は破壊されるのだから、少なくともそのとき君は手を持っていることも知らないということを我々は主張しているのだ。したがって、その意味では(EC)も(SSI)も到底、懐疑論の脅威から逃れているわけではない。³⁸」

この懐疑論者を便宜的に「穏健な懐疑論者(Moderate Skeptic)」と呼んでおくとしよう。穏健な懐疑論者は、事実上次の主張を擁護している。

(MSK) 懐疑論の教室といった哲学的な文脈にマク某が置かれると、外的な事物の存在についての知識を持たない³⁹

EC と SSI 論者はたしかにこの(MSK)を認める。まさにそのことが懐疑論の説得性を保持しておく動機でもあったからである。(EC)と(SSI)に共通するのは、哲学的な文脈においては——(EC)によれば知識帰属者が哲学的な文脈に、(SSI)によれば知識主体が哲学的な文脈に立っているという違いはあるが——日常的な知識に関する知識帰属文が偽だという主張である。先の(MSK)を擁護する穏健な懐疑論者は、まさにその点を指摘することで、「(EC)も(SSI)も到底懐疑論の脅威から逃れているわけではない」と主張する。たしかに帰属者にせよ知識主体にせよ、(EC)または(SSI)によれば、それが属する文脈を無視して知識帰属文の真理条件または真理値を決定することはできない。だが、穏健な懐疑論者が問題視するのは、哲学的文脈においては日常的な命題が真とならないことなのである。つまり、懐疑論の説得性を保持するという両者の懐疑論解決の利点が、奇しくも穏健な懐疑論者にとっては不満の原因となっている。

この穏健な懐疑論者による不満に、EC および SSI 論者は何と言うだろうか。一つの可能性として考えられるのは、日常的な文脈の中に——話者としてであれ、主体としてであれ

——我々がいるならば、外的な事物の存在に関する命題も破壊されることはないのだから、それで十分ではないかという返答である。たしかに、哲学的な文脈が持つ脅威は依然として存在する。とはいえ、それは認識論の講義に出席する真面目な学生マク某にとっては深刻な脅威であるにせよ、同じ講義に出席する怠惰な学生某マン(Wyman)の知識にとっては何ら問題ではない。某マンは怠惰であるがゆえ、講義をほとんど聴いておらず、懷疑論を真面目に受け取ることがないのだでしょう。そのとき、マク某の隣で怠けている某マンは、自分がBIVではないこと、ひいては手を持っていることを知らないのだろうか。(EC)もしくは(SSi)に従えば、某マンは知っていると言ってよいはずである。というのも、彼が自身自身に知識を帰属する際、BIVの仮説に関する可能性が際立つことはなく、さらに実践的な関心の対象にもならないために、知識を持っているとみなすのに、真面目なマク某とは異なり、彼には低い規準しか課せられないからである⁴⁰。つまり怠惰な某マンの持つ知識は、彼が怠惰である限りにおいて、まったく破壊されることがない。これは、次のことを示唆する。すなわち、知識帰属者でも知識主体でもありうる我々は哲学的な文脈の中にいないほとんどの場合において——すなわち哲学的に怠惰である限り——、日常的な知識を穩健な懷疑論者による攻撃から守ることができるのである。一言で言えば、こうである。「怠惰は知識を救うのだ。」

一見逆説的に聞こえるこの標語を掲げることで、ECもしくはSSI論者が穩健な懷疑論者を牽制するとしたら、これに対し懷疑論者はどのように答えるのだろうか。いや、本当は我々はそのように問うべきではないのかもしれない。というのも、懷疑論者が(MSK)を主張することで本当に満足するかどうか疑う余地があるからである。言い換えれば、日常的な知識が脅威に晒される危険性を、「哲学的もしくは非日常的な文脈における」という意味での局所的・限定的なものと懷疑論者がみなすかどうかは疑わしい。もし穩健な懷疑論者が真正の懷疑論者(Genuine Skeptic)でもあるならば、(EC)と(SSi)による懷疑論への対処はまったく不十分である。ほとんどの真正の懷疑論者は、おそらく(MSK)だけで満足することはないだろう。彼らが擁護したいのは、きっと次の主張である。

(GSK) あなたは外的な事物の存在についての知識を持たない

(MSK)で言われる「局所的な脅威」に真正の懷疑論者が不満を持つのは、たとえば認識論の教室を一步出れば、彼らの主張が——懷疑論における(P1)が偽となるため——効力を持たないことになってしまうからである。真正の懷疑論者からすれば、(MSK)はあまりに穩健な、もっと言えば「懷疑論」の名に値しない主張と映るかもしれない。他方、その(MSK)も含意する(GSK)によれば、いかなる文脈においても我々は日常的な知識を持つことができない。この点こそ、懷疑論がもたらす本当の危険性であると真正の懷疑論者は論じる。あくまで(GSK)——これは懷疑論的論証の(C)に該当する——を主張することでもって、文

脈に関係なく我々の知識のほとんどを瓦解させるという目的こそ、真正の懐疑論者が目指すべきものなのである。

では、その目的のため、真正の懐疑論者はどのようにして(GSK)を擁護するのだろうか。前節までの我々の理解によれば、EC と SSI 論者は(GSK)を論駁できていたはずである。言い換えれば、少なくとも日常的な文脈においては、「マク某は手を持っていることを知る」という知識帰属文は真となり——そして哲学的怠惰は知識を救い——うる。しかし、(GSK)を立てる真正の懐疑論者はそれすら認める必要がない。彼らの目的は、仮に(EC)と(SSI)を認めたととしても、(GSK)が成立すると証明することなのである。いま EC および SSI 論者と真正の懐疑論者の間で争点となりうるのは、(EC)(と(CI)における(2))もしくは(SSI)による主張がそれ単独で、懐疑論的論証における(P1)という発話が表す命題の真理値、つまりマク某が BIV ではないことを知っているのかどうかを決定しうるのかという点である。そのとき、真正の懐疑論者がたとえば次のテーゼ——「正当化に関する穏健な懐疑論(Modest Skepticism about Justification)」によるテーゼ——を主張していると考えるのはミスリーディングである。

(MSJ) 外的な事物の存在についての信念は、それを否定する信念よりも正当化されているが、知識は高い規準を課すのだから、一方が他方よりも正当化されているとするだけでは知識とみなすのに不十分である

(MSJ)で不十分なのは、それが(EC)や(SSI)の主張と端的に反目するからである。EC 論者は、知識を持つとみなされるための規準が常に高いわけではないと主張する。話者の文脈が知識帰属文の真理条件に影響するため、その規準は変化しうるからである。また SSI 論者は、仮に「知る」という語の意味論的値が不変であるとしても、知識帰属文の真理値が主体にとっての実践的状況に部分的に依存すると考える。そのため(SSI)も同様に、(MSJ)に含まれる「高い規準を課す」という箇所と抵触するだろう。つまり、真正の懐疑論者がもし(MSJ)を擁護したとすると、懐疑論をめぐる論争は、「知識を帰属させるための規準は文脈によって変動するのか」もしくは「我々はどの規準をとるべきなのか」という、まさに(EC)および(SSI)の妥当性をめぐる論争にすり替わってしまいかねない。これは決して真正の懐疑論者の本意ではないだろう。彼らが主張したいのは、(EC)や(SSI)を擁護したとしてもなお、BIV の仮説によって(P1)の表す命題が常に真となる——ひいては(GSK)もしくは(C)が真となる——ことだからである。

そこで我々は、(GSK)を主張したい真正の懐疑論者は次のテーゼ——「正当化に関する真正の懐疑論(Genuine Skepticism about Justification)」——を擁護するべきだと考える。

(GSJ) 外的な事物の存在についての信念は、それを否定する信念と同じ程度にしか正

当化されない

注目すべきは、(GSJ)が知識そのものではなく、正当化(justification)に関するテーゼだということである。知識の必要条件に正当化が含まれると考える真正の懐疑論者は、この(GSJ)を自身の論証の要とするだろう。というのも、EC および SSI 論者はともに(GSJ)を論駁できていないからである。(EC)も(SSJ)も決して正当化に関する理論ではない⁴¹。したがって、正当化に関する真正の懐疑論者は次のように問いかけることで、EC と SSI 論者を牽制するかもしれない。

「なるほど、日常的な文脈にいる——たとえば友人と談話している——間に君が『自分が手を持っている』と言うのならば、その知識帰属文が真だと君——(ES)もしくは(SSJ)を擁護する者——は主張するのだな。だが、どのようにして証拠や信頼性、敏感性、それに主体の関心や主体にとっての重要性といったものが、真なる信念が知識として形成される要因となるんだい？この正当化に関して君たちは何も言っていないではないか。とすると、先の(GSJ)は君が擁護する立場ではブロックすることができないことになる。我々真正の懐疑論者が主張しているのは、正当化についての懐疑論を援用することで、懐疑論的論証における(P1)を支持し、そこから導出される(C)もしくは(GSK)を擁護することだ。つまり、いかなる文脈においても知識帰属文が偽だということを我々は主張しているのだ。したがって、(EC)も(SSJ)も到底、懐疑論の脅威から逃れているわけではない。」

このように語りかけるときに彼ら懐疑論者が頼るものこそ、まさに BIV の仮説である。懐疑論的な命題——「マク某が BIV である」という文が表すもの——が成立するのを妨げる証拠をマク某は一切持っていないはずである。この仮説がある限り、決して「マク某は BIV ではないことを知っている」という文が表す命題を真とすることはできない。我々の知覚的な経験は、マク某が BIV ではないことを保障してくれないからである。つまり、真正の懐疑論の真骨頂は、「いかなる証拠に基づいた拒否にも影響されない⁴²」ことなのである。懐疑論者が仮に(EC)と(SSJ)を認めたとしても、(GSJ)を認める限りにおいては(P1)の表す命題が偽とならず、その結果(GSK)もしくは(C)という——我々の日常的知識を破壊する——脅威から誰も逃れることができないだろう。

それゆえ、(GSJ)を自身の理論だけでは論駁することのできない EC と SSI 論者は、(MSK)のみならず、(GSK)すら論駁することができていないと言える。この問題の本質は、(EC)によって日常的な文脈において課される緩い規準、もしくは(SSJ)によって BIV の仮説が深刻な実践的問題とはならない場合においてさえ、マク某のみならず、某マンもまた自分が手を持っていることを信じるための理由を、我々の知覚的な経験がどのようにして保障してくれるのかまったく明らかではない点にある。これは、いかなる規準をもってしても、(GSJ)

を拒否することができない限り、EC と SSI 論者が懐疑論を論駁できているとは決して言えないことを意味する。某マンのように怠惰であろうと、マク某のように真面目な学生であろうと、真正の懐疑論者を論駁することは、少なくとも(EC)もしくは(SSJ)だけに頼る限りは不可能なのである。

もちろん、(GSJ)を拒否し(MSJ)を採るような穏健な懐疑論者に対しては、(EC)もしくは(SSJ)を利用する懐疑論解決策は、ともに日常的な知識が苦境から救われうることを示していると言ってよいかもしれない。(EC)と(SSJ)によって、日常的な文脈においては、少なくとも我々の日常的な知識は守られるからである。だが、懐疑論者が(MSJ)といった穏健な立場をとる必要はどこにもない。むしろ彼らが真正な懐疑論者でありたいと望むならば、(GSJ)を主張することで、(GSK)を擁護することだろう。そして、(EC)と(SSJ)ではこうした正当化に関する懐疑論をも認める懐疑論者に対処することができない。よって、その意味では(EC)もしくは(SSJ)というテーゼは、それぞれ単独では懐疑論に対する解決として無力なのである⁴³。

6.

さて、以上の議論はいったい何を示唆するのだろうか。この最後の節では、懐疑論「解決」に焦点を当てて考えてみたい。通常「懐疑論を解決する」と言うことで意味されるものには、少なくとも以下の二つがあるだろう。

- (3) 懐疑論の議論を常に偽とする((P1)もしくは(P2)を否定する)
- (4) 懐疑論の説得性を保持しつつ、日常的な知識を守る

EC および SSI 論者による懐疑論「解決」の利点は、懐疑論を端的に偽とすることなく、日常的な知識を守ることができる点だとされていた。つまり、(4)が EC と SSI 論者にとっての懐疑論「解決」である。しかし、前節の議論から明らかになったのは、その目的すら達成されないということである。というのも、(GSJ)によって、いかなる文脈であれ、マク某そして某マンですら日常的な知識を維持するに足る理由を提供できないからである。真正の懐疑論者からすれば、(EC)と(SSJ)の立場はともに、懐疑論の論証における(P1)が偽になりうる可能性を示しただけであって、その可能性も結局(GSJ)によって挫かれてしまうにすぎない。こう見ると、EC と SSI 論者の懐疑論解決への貢献は、(MSJ)の中身を否定しただけのようにも見える。

もし(GSJ)を否定したければ、EC もしくは SSI 論者は正当化に関する外在主義(externalism about justification)にコミットするのが最も見込みある選択肢の一つだろう。簡略になるが、たとえばゴールドマンによって本格的に提唱された典型的な外在主義である「プロセス信頼性主義(process reliabilism)」を考えよう。プロセス信頼性主義によれば、「信念が正当化されるのは、信念が(比較的)信頼できる信念形成プロセスによって生み出されるとき、かつ

そのときに限る。⁴⁴」そこでは、信念形成プロセス——たとえば知覚(perception)——は関数という概念で分析され、そのアウトプットである信念が偽よりも真である「傾向(tendency)⁴⁵」が強い事実によって、そのプロセスは信頼できるとされる。さて、プロセス信頼性主義が懐疑論に対して用意する答えは次の通りである。すなわち、「懐疑論的論証における(P1)は偽である。懐疑論者が我々の知識の破壊に成功するには、我々の信念を生み出すプロセスが信頼できない(unreliable)ときであろう。しかし、真正の懐疑論者はたとえば知覚のプロセスが信頼できないことを示すことができるのだろうか。できないだろう。というのも、信頼性という問題は経験的な問題であるのに、経験的な信念は(少なくともマク某がBIVであるという信念と同じくらいしか)正当化されないと懐疑論者が考える以上、経験的なデータに頼るわけにいかないためである。つまり懐疑論者は、知覚的なプロセスが系統的に信頼できないとみなすことに失敗する。よって、たとえばマク某は手を持っているという信念が、信頼できるプロセスから生み出されることを妨げられないので、プロセス信頼性主義の主張によってその信念は正当化される。したがって、マク某はそのとき(信頼できる推論を使って)BIVではないと知ることができるのである。⁴⁶」

もちろん、(EC)と(SSJ)はそれだけでは正当化に関する外在主義を含意しない。そのため、EC 論者であるデローズが懐疑論を解決しようとして、ノージック流の「信念敏感性(belief sensitivity)」を文脈主義のうちに持ち込むのは決して偶然ではない⁴⁷。デローズの対処法に象徴されるように、懐疑論を解決へと導くには、(EC)や(SSJ)では不十分であり、(GSJ)を否定するに足る外在主義的な足場が不可欠なのである。さらに、一部の外在主義者は(P2)を否定することで、実際に懐疑論を偽とみなす立場をとる。彼らによれば、懐疑論「解決」とは、(4)ではなく、(3)の仕方ではなされねばならない⁴⁸。もしかするとこうしたことは、(4)の仕方による解決がそもそも不可能であることを示唆するのかもしれない。というのも、もし知識の必要条件に正当化が含まれるなら、正当化に関する外在主義者は懐疑論的論証における(P1)もしくは(P2)のいずれかを拒否してしまい、その解決は(4)ではなく(3)を目的としたものになってしまうからである。だが、本稿ではこれ以上外在主義について論じる紙幅の幅はない。

また、(EC)と(SSJ)が(4)の意味ですら懐疑論を解決できないという事実は、冒頭で述べた「なぜ懐疑論が説得力を持つように見えるのか」という問いに答える必要はあまりないと考える動機を作るかもしれない。なぜならば、(EC)や(SSJ)ではその解決が困難であった懐疑論に対して有望な解決策を与える外在主義によれば、もはや懐疑論は端的に偽だからである。そこでは、懐疑論の持つ説得性は我々の内在主義的な嗜好が反映された誤謬にすぎないかもしれないため、そこには心理学的な説明が与えられるのみだろう。しかし、そこまで至ると、(少なくとも自然化を前提としない)認識論者が担うべき仕事はそれほど残っていないように思われる。つまり、(EC)もしくは(SSJ)によって提示された懐疑論への解決策の失敗によって示唆されるのは、懐疑論を偽とみなす者は説得性を説明する必要があるのか疑問視されてよいということである。説得性を説明するとみなされた EC および SSJ

論者の(4)の解決が成功しなかったことは、それを暗に示しているように我々には思われる。

さて、我々の結論はこうである。すなわち、(P1)と(P2)から(C)を導出する懐疑論的論証による日常的知識の破壊を成功に導くものは、その議論の妥当性というよりも、むしろ(GSJ)という否定しがたいテーゼである。(GSJ)を拒否できない限り、懐疑論解決として(3)を、まして(4)も望むことができないだろう。ECとSSI論者は一見すると、懐疑論論駁を(4)の形で行っているようだが、実際のところ多くの真正の懐疑論者はそのような解決によって沈黙することはない。(EC)と(SSJ)のいずれをとったとしても、結局BIVではないことというマク某および某マンの信念が正当化されることはないので、彼らが手を持っているという信念もまた正当化されず、知識とはみなされないのである。もちろん、知識の必要条件から正当化を取り除くという選択肢や、正当化に関する外在主義を(EC)もしくは(SSJ)と同時に取り込むという選択肢がないわけではない⁴⁹。こうした選択肢をとれば、ECとSSI論者は、(3)の意味で懐疑論論駁をすることができるだろう。だが、そうした方策に頼るとき、ECもしくはSSI論者は、説得性を説明できないという犠牲を払うとともに、実質的には単独の理論で懐疑論を解決するのを諦めている。この点において、(EC)と(SSJ)は懐疑論解決に失敗し、さらには無力である。したがって、知識を救うことができるのは、懐疑論に対するあなたの真面目さでも、まして怠惰でもないのである。

(慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程)

注

- 1 Putnam (1981), p. 5f (邦訳, 7頁以下). なお、このパトナムによる水槽脳の仮説は様々な分野で取り上げられる応用性を持っている。たとえば、パトナムによる反懐疑論的な論証とその検討については、柴田 (2012)を見よ。
- 2 (P2)は、閉包原理(principle of closure)と呼ばれる原理による。閉包原理そのものは、次のように表現される(「 P 」および「 Q 」は命題を表す変項、「 $K_S(P)$ 」は「主体 S は命題 P を知る」を表す)。

$$(PC) \quad \Box((K_S(P) \ \& \ K_S(P \rightarrow Q)) \rightarrow K_S(Q))$$

正確を期すならば、実は(PC)の定式化では——特に「 $K_S(P \rightarrow Q)$ 」をどう解釈すべきかという点において——不十分である(詳しくはHawthorne (2004), §1.4を見よ)。さらに、ドレツキやノージックといった一部の認識論者は、(PC)を誤りとみなすことにやぶさかではない。たとえば、ドレツキは次のように述べる。「何かがシマウマであることは、動物園の許可によりシマウマそっくりに巧妙に変装させられたラバではないことを含意する。[では]あなたは、これらの動物が巧妙に変装させられたラバではないことを知っているのだろうか？もしあなたがこの問いに『知っている』と答えたいのなら、その理由とそう主張するのに利用しうる証拠を今一度考えてほしい。その動物をシマウマとみなすのにあなたが持っていた(had)証拠は、事実上無効化されたはずである。それというのも、その

証拠はその動物がシマウマそっくりに巧妙に変装させられたラバではないことを考慮に入れていないからである。」(Dretske (1970), pp. 1015f) さらに、BIV の例に引きつけて彼は次のように主張する。「(...)どうして、私は手を持っていることを知っているが、手を持たない水槽の中の脳ではないことを知らないと言うことは馬鹿げていないのだろうか。それは、[『私は手を持っていることを知り、かつ手を持たない水槽の中の脳ではないことを知らない』という文における]第二連言肢が、第一連言肢を主張するひとによって、通常は(可能性としては認められずに)無関係だと想定される可能性を持ち込んでいるからなのである。」(Dretske (2005), p. 17) 我々はこうした(PC)の拒否にある種の魅力が備わっているのは認めるが、紙幅の都合上その検討はかなわない。本稿では、(PC)は——その粗雑な形式においてさえ——直観的には正しい原理だとされるため、そうした多くの認識論者が受け入れる直観に従って、(PC)および(P2)が真であることをいまは前提としておく。

- 3 ただし、BIV の仮説を認めたとしても、あらゆる知識が奪い取られるわけではない。たとえば、私は脳を持つという命題や「 $1+1=2$ 」といったアプリオリな命題は、私が仮に BIV でも知識の中に含めてよいかもしれない——もちろん、デカルトなら少なくとも後者は否定するだろうが。
- 4 困ったことに、EC には様々な呼び名——たとえば「帰属者文脈主義(Attributor Contextualism)」や「会話的文脈主義(Conversational Contextualism)」——が存在し、未だ統一されていない。本稿では混乱を避けるため、EC を一般的な文脈主義の名称として採用する。
- 5 SSI は、細部こそ違えど、スタンリーによる「関心相対的不変主義(Interest-Relative Invariantism)」という名の立場や「実践的な侵犯(Pragmatic Enchroachment)」と呼ばれる立場と基本的な主張を共有している。スタンリーが「主体敏感的」という名を冠しないのは、SSI を特徴づけるのは、知識主体についての事実——この事実はほとんどの知識理論が認める——ではなく、「主体についての特定の非伝統的な事実、すなわち主体の実践的な関心に対して敏感であること」(Stanley (2005), p. 122) だからである。
- 6 しばしばムアは(P1)を否定した反懷疑論者として描かれがちだが、その描像はムア自身の主張の理解としてはあまり正確ではない。なぜなら、知識についての懷疑論ではなく、外的世界の存在についての懷疑論を展開する懷疑論者こそ、ムアが論駁しようとする論敵だからである(Moore (1942)を見よ)。したがって、「私の手を二本あげて、右手で特定のジェスチャーを取りながら『ここに一本の腕がある(Here is one hand)』と(...)付け加えることによって」(Moore (1939), p. 166)、(P1)の代わりに次の

(P1*) 私は手を持つことを知っている

をムアが擁護していたという解釈は単なる事実誤認でしかない。ただし、困ったことに後にムアは次のようにも述べる。

「(...)私は今立っていることを知っているので、私は夢を見ていないことを知っているとは私は論じることができる。私を批判する者は次のように主張するかもしれない。すなわち、君は夢を見ていないことを知らないのだから、君は今立っていることを知らないのだと。【だが、】もし批判者が、私の『今

立っていることを知っている』と主張する理由よりも、『夢を見ていないことを知らない』と主張するための優れた理由を与えることができない限り、一方の[ムアによる]議論は他方の[懐疑論的な]議論とちょうど拮抗するのである。」(Moore (1959), p. 247)

この議論は明らかに、知識の懐疑論を扱っているだろう。そのため、後期ムア——この呼び名が適切かどうかはわからないが——は、少なくとも(P1*)を擁護し、さらに(P2)の対偶をとることで、(P1)を否定する反懐疑論者として描かれるのである。しかし、こうした後期ムア的な態度は、「どうしてあなたは自分がBIVではないことを知りうるのか」という問いに説明を与えることができない。言い換えれば、懐疑論と「拮抗する」と主張するだけでは、懐疑論者は「懐疑論の真の問題は先の問いに答えを与えることができないことだ」とみなして、決して納得しないかもしれない。したがって、ムアの懐疑論への態度が時期によって異なっているように見えるうえ、さらに後期ムアが提出する解決策をもってしても、(P1)を否定することによって懐疑論に解決を与えるのは難しい(こうした点を乗り越えようと登場したのが、安全性条件を知識の分析に課す新ムア主義である)。

- 7 本稿では、知識帰属文に触れる際、煩雑さを避けるため時点に関する言及は省略されている。また、知識否定文(「 S は P を知らない」といった文)についても、本稿では知識帰属文と同様に扱われる。
- 8 Hawthorne (2004), pp. 68fにおける例を見よ。ただし、多少細部は変更してある。
- 9 たとえば、ノージックの立場に従って、真なる信念が知識となるには、「敏感な信念」であることを要求するとみなすと、「ウィーン」と答えた子どもは知識を持つとはみなされない(Nozick (1981), ch. 3を見よ)。というのも、もしオーストリアの首都がベルグラードであるような現実世界から比較的近い可能世界でも、その子どもは本の情報を信頼して、オーストリアの首都がウィーンだと思えるように見えるからである。つまり、信念が敏感な信念であるためには「 $B_S(P)$ 」を「主体 S は P を信じる」と解釈して、近い可能世界において「 $\neg P \square \rightarrow \neg B_S(P)$ 」が満たされねばならないが、今のケースでは満たされないために、その子どもは知識を持たないとみなされるのである。
- 10 スタンリーはこの立場を「主知主義(Intellectualism)」と呼んでいる(Stanley (2004))が、本稿で我々はファントルとマクグラスに従って「純粋主義」で統一する(Fantl and McGrath (2009)を見よ)。
- 11 Hawthorne (2004), p. 53.
- 12 Fantl and McGrath (2009), p. 28.
- 13 とはいえ、信頼性(や敏感性、安全性)といった要件を持ち込めば、懐疑論の餌食にならないで済むかもしれない。この点は本稿の第6節以降の話題に関わるので、ここでは示唆するにとどめておく。
- 14 アンガーは過去に、こうした立場を採用していたように見える(Unger (1975); DeRose (2009a), pp. 26fを見よ)。ただし、知識帰属文の真理条件に関しての不変主義を擁護することは、文脈によって知識帰属文の主張可能性条件(assertibility condition)が変動しないことを含意しない。実際、アンガーは懐疑論を受け入れ、あらゆる知識帰属文は——形而上学者としてのアンガーにも匹敵するラディカルさで——偽であると主張するが、それでも日常的な文脈ではそれは主張されうる(assertible)と考える。とはいえ、現代においてはもはやそのような悲観的な立場をほとんど見かけないことが、その立場をとることの困難さを示しているのかもしれない。

- 15 EC の(2)に対する態度に触れなかったのは、実際のところ EC 論者は(2)を拒否することも可能だからである。それによれば、「知る」という語は会話の文脈によって変動する異なる規準を満たさねばならない一方で、その規準が満たされるかどうかは主体の実践的な要因に部分的に依存する。とはいえ、「反主知主義者[または反純粹主義者]としての文脈主義は筋の通った可能性の一つではあるが、文脈主義の直観的な魅力の一つのために、カギとなるテストケースについて望ましい結果を保持しながら、主知主義[または純粹主義]を支持することができるのである」(DeRose (2009b), p. 189)と EC 論者によって述べられることからわかるように、(2)を拒否する EC 論者は、その理論としての可能性にもかかわらず、直観に即した仕方で適切に説明することができないケースが存在するという点で、EC をとる動機を失ってしまいかねない。よって EC は必ずしも(2)の支持を含意するわけではないが、理論的な動機を優先すれば、EC 論者は(2)を擁護するべきだという点に注意せよ(注 16, 18 も見よ)。
- 16 EC を擁護する大きな動機の一つは、デローズによって提出された銀行のケース(DeRose (2009a), pp. 1f を見よ)や、コーエンによって提出された空港のケース(Cohen (1999), p. 58 を見よ)といった、いわゆる「利害関心がシフトしているケース(stakes-shifting case)」に対して、我々の直観に適合する説明を与えうることである。また、EC は「宝くじのパラドクス」(Lottery Paradox)とでも言うべき「知識主体 *S* は自分のくじは当たらないだろうということを知っている」ことに関する問題にも解決を与えうる(Cohen (1998)を見よ)。他方 SSI を擁護する大きな動機の一つは、そうした EC の主張そのもの——「知る」という語の文脈敏感性——を否定し、EC に頼らずとも、そうしたケースを説明しうることである。他にもそれぞれの立場を擁護する動機はたくさんあるが、本稿では触れる必要がない。
- 17 Bach (2005), p. 56 を見よ。EC 論者として知られるコーエンですら、『知る』という語を含む(...)文の真理値(truth-value)は文脈的に決定された規準に依存するだろう」(Cohen (2000), p. 94)と述べ、真理値と真理条件の違いにあまり神経質ではないのが実際のところである。しかし、こうした違いに無頓着であることは、「同じ命題を表す異なる発話トークンは、異なる文脈では異なる真理値を持つ」と主張する非指標的文脈主義(nonindexical contextualism)と(EC)を混同してしまう誤りを犯してしまうだろう(詳しくは MacFarlane (2009)を見よ)。非指標的文脈主義は不変主義的な要素も兼ね備えながら、(EC)を擁護できる立場である。この立場の可能性は、真理条件と真理値の変動を混同すると、(EC)を不当に制限してしまう危険性を示すかもしれない。
- 18 実際に、文脈主義の代表格であるデローズは(CI)における(2)、すなわち純粹主義を擁護している。しかし、実際はその擁護は多少複雑である。たしかに、(EC)によれば、主体が知っているかどうかは、真理関連的ではない(not-truth-relevant)要因に依存するわけではない。しかし、EC 論者は「話者が正しく主体が『知っている』と記述できるかどうか——我々の意味では、主体が話者の文脈において『知っている」とみなされる(counts as knowing)』かどうか——はそうした要因に依存しうる」(DeRose (2009c), p. 188)ことを認めるため、実践的な要因を知識の理論からすべて追いつくわけではない。少し先取りになるが、実践的要因に対する EC と SSI の態度の違いは、デローズによれば次のようになる。「文脈主義においては、知識帰属は(真なる信念を持つ)主体がこれこれの認識論的規準を満たすという思想[または命題]を表し、そこではまさにどの規準に訴えるかは実践的要因によって影響されうる一方で、SSI においては、知識帰属は(真なる信念を持つ)主体が彼女の実践的状況にふさ

- わしい認知的規準を満たすという思想[または命題]を表している。そして、そうした思想[または命題]が真であるかどうかは、主体の実践的な状況がどのようなものであるかに依存するとされる。」(ibid., pp. 189f) つまり、EC 論者が反対するのは真理値に影響を与えるものとしての実践的要因であって、他方でそれが真理条件に対しては影響を与えることを彼らは認めうる点に注意せよ。
- 19 それゆえに、(EC)は誤解を招きやすい主張である。正しい理解のためには、次のフェルドマンの言葉が役に立つだろう。「文脈主義者が、知識の規準が文脈に従って変化すると考えるのは正しくない。そうではなく、文脈主義は『知識』という語の適用の規準が変化すると考えているのである。」(Feldman (2004), p. 24)
- 20 Cohen (1999), p. 57.
- 21 間接的には、真理条件の変動に主体の状況が関係しうる。というのも、EC 論者は「話者の文脈が、主体の文脈に適切な認知的規準を選択することを妨げるものは(...)何もない」(DeRose (2004), p. 349) と考えることができるからである。つまり、主体の状況を適切に反映した話者による会話の文脈を考慮すれば、真理条件の変動と主体の状況はまったく無関係であるわけではない。
- 22 デローズは、関連する代替可能性の範囲に影響を与える要因として二つの要因をあげる(DeRose (1992); DeRose (1996); DeRose (2009a)を見よ)。その二つは、主体要因(subject factor)と帰属者要因(attributor factor)と呼ばれ、(EC)が(EC)たるゆえんは、帰属者の言語的・心理的文脈といった後者の帰属者要因を認めるからである。本文でたびたび言及される「帰属者が参加する会話の文脈」とはまさにこの帰属者要因のことである。帰属者要因が異なれば、「命題 P を知っている」とみなされるのにどれくらい十分な認知的立場に立たねばならないか」という知識帰属に関する認知的規準も変化し、それは結果的に知識帰属文の真理条件の変化を引き起こす。他方、主体要因は主体の状況の特徴であり、ギネットによって示唆され、ゴールドマンによって有名になった「ニセモノの納屋ケース(fake barn case)」は、主体要因の違いが直接、知識帰属文の真理値に影響を与えることで説明される。周辺に多くのニセモノの納屋があるという特殊な主体要因によって、通常のケースにおいて持つはずの知識は奪われてしまうのである。これら二つの要因の違いを一言で言えば、「帰属者要因は認知的規準(知識帰属の真理条件)を定める一方で、主体要因はそれらの規準が満たされるかどうかを決定する」(DeRose (1996), p. 195)ということである。デローズは、帰属者要因と異なり、主体要因は真理条件に影響を与えることがないと強調する(本文で述べられた真理条件の変動と真理値の変動の区別を思い出してほしい)。彼は、この点こそが自身の擁護する(EC)が、関連する代替可能性理論(Relevant Alternative Theory)より優れている理由だと主張するが、これ以上は本稿の話題から逸脱するだろう。
- 23 注意せねばならないのは、「もし認識論の教室では真だった(P1)が、友人とランチをする文脈に移ると偽とみなされる」と言うとき、知識そのものが文脈によって消滅したり出現したりすることを意味するわけではないという点である。EC 論者の一人と目されることもあるルイスは、自身の論文に「逃避的な知識(Elusive Knowledge)」という衝撃的なタイトルを付けているが、これは多少ミスリーディングである。ルイスは「おそらく我々は日常生活においてはたくさんのことを知っている。しかし我々の知識を厳しい目で眺めるときには、おそらくそれは消えてなくなる(goes away)のである」(Lewis (1996), p. 550)と言うが、(EC)に従えば実際は「 S はたくさんのことを知っている」のではな

く、「*S*はたくさんを知っているとみなされる」、もしくは『*S*はたくさんを知っている』が真である」と言い換えられなければならない(Cohen (1999), p. 65; DeRose (2009c), p. 216 を見よ)。このような言い換えが必要になるのは、意味論的な立場である(EC)が本来はメタ言語的な言い方で知識に関して主張せねばならないからである——ただし、当のルイス自身はこの点を決して誤解していたわけではなさそうである。というのも、彼は(EC)に関する一連の洞察を支持した後、「私は(...)自らの言い分を公平かつ公明に言うこともできただろう。それは退屈なものだっただろうが、そうすることもできたのである。その要領は、『意味論的上昇(semantic ascent)』に頼ることだっただろう」(Lewis (1996), p. 566)と述べ、自身の見解に注意を促しているからである。彼はおそらく誤解されるのを承知で、確信的に「逃避的な知識」というタイトルを付けている。

また、こうした「意味論的上昇」を用いれば、しばしば(EC)に対する強力な反論の一つとみなされてきたユアグローによる不平——一般化すれば、「私は *P* を知っていた(knew)が、もはや私は *P* を知らない(no longer know)」が真になること——に対しても対処することができる(Yourgrau (1983)を見よ)。その不平の説得性は、「私は *P* を知っているとみなされていたが、もはや私は *P* を知っているとみされることはない」と意味論的上昇が施された仕方では表現されれば、それほど強力なものにはならないだろう(DeRose (2009c), p. 216 を見よ)。

24 DeRose (2005), p. 172.

25 DeRose (1995), p. 185.

26 コーエンによれば、普通の話者は「知る」という語の文脈依存性に気付かないために懐疑論において我々は知識帰属が互いに衝突すると誤って結論づけてしまう(Cohen (1999), p. 77 を見よ)。よって、(EC)と誤謬説——話者は文脈主義的な意味論によって系統的に誤って考えてしまうという主張——は親和的だとみなされることが多いが、他の側面から見れば、我々の知識帰属文を話す話者としての直観——そして(EC)の利点は直観に適合することだった——と誤謬説はあまり相性がよくないようにも見える。

27 Schiffer (1996), p. 326. また、Hawthorne (2004), §2.7; Stanley (2005), p. 66 も見よ。

28 たとえば、DeRose (1992), p. 925; Cohen (2001), p. 91 を見よ。

29 MacFarlane (2005), p. 203.

30 ドレツキも似たような批判を行っている。Dretske (1991), p. 191 を見よ。

31 Neta (2007), p. 180 を参考にした。ただし、細部は多少変更してある。

32 Stanley (2005), p. 86.

33 *Ibid.*, p. 127 における例を見よ。ただし、細部は多少変更してある。

34 もちろん、知識と行為の間にどのような結びつき方があり、そしてどれくらい結びついているのかには疑問が呈されてよい。しかし、スタンリーが指摘するように、(CI)における(2)を否定する反純粹主義者の多くは「ひととは知っていることに基づいてのみ行為すべきである」というテーゼを掲げている(*Ibid.*, p. 9 を見よ)。この緩やかな意味では、たしかに知識と行為が結びついていると言ってもよいように思われる(注 35 も見よ)。

- 35 *Ibid.*, p. 92 を見よ。ホーソンも、主体にとって誤りの可能性が際立つことによって、主体は知識主張を撤回しようと主張し、その仕方を考察している(Hawthorne (2004), pp. 169ff を見よ)。また、主体が合理的にあたかも *P* であるかのように行為するときに関り、その主体は *P* を知っているという原理——これを(KA)と呼ぼう——を擁護するファントルとマクグラスもまた、「我々はしばしば知識を引き合いに出すことで、行為を正当化する(defend)」(Fantl and McGrath (2007), p. 561)と述べたうえで、「行為を正当化したり非難したりする際に、知識を引き合いに出すことがその役割を担うのだという事実こそが、(...) [KA] が真である証拠なのである」(ibid., p. 564)と主張している。知識と実践的状況の結びつきを強調する彼らがみな一様に、(CD)における(2)を否定し(KA)を擁護するのは単なる偶然ではない。
- 36 Davis (2005), pp. 32f を参考にした。
- 37 こうした(ES)と(SSD)の類似は実は当然のことである。というのも、一人称で現在形によって表現される知識帰属文においては、帰属者(の文脈)と知識主体(の状況)が一致するためである。それゆえ、(ES)と(SSD)の違いを明確にするのは、本来三人称もしくは過去形や未来形によって表現される知識帰属文を扱わねばならない。しかし本稿の目的からして、両者の違いをこれ以上明確にする必要はない。
- 38 (EC)に対してのみだが、ドレツキがこれと近い批判を行っている。彼は次のように述べている。すなわち、文脈主義は「深刻な懐疑論的な問題から彼[知識主体]を引き離すことで、(...) [彼の]知識を守ろうとする。(...) [しかし、]もし懐疑論が偽ならば、スーパーではもちろん、哲学を教える教室の中でも偽であると期待しようではないか。もし偽ではないと言うのなら、我々は本当に懐疑論への解決を持たないことになる——少なくとも我々が懐疑論者に与えるものとしては」(Dretske (2004), p. 182)
- 39 (EC)流に言えば、意味論的上昇が必要だが(注23を見よ)、煩雑になるので省略しておく。
- 40 ただし、教授やマク某が某マンに知識を帰属させる場合だと、(EC)によれば、某マンは経験的知識を持たないとみなされねばならないことに注意せよ。
- 41 ただし、初期 EC 論者の一人であるアニスは、文脈主義を基礎づけ主義(foundationalism)や整合主義(coherentism)に代わる正当化に関する理論として擁護している(Annis (1978)を見よ)。文脈的なパラメータを正当化に組み込むことを提唱する彼は、それによって正当化の社会的側面を強調したいようだが、実際のところこの立場は(EC)とはそれほど類似点がないので、本稿では彼を EC 論者とみなすのは控えたい。またネタも、証拠とみなされるべきものが帰属される文脈で変化するという意味での、証拠についての文脈主義を擁護しているが(Neta (2002)を見よ)、この立場もやはり(EC)から逸脱してしまうので、我々は彼の立場を EC 論者とはみなさないこととする。
- 42 Cohen (1988), p. 111.
- 43 コーエンもスタンリーも、(EC)もしくは(SSD)を擁護する者として、懐疑論に対して完全な解決を与えることの困難さを自覚しているようである(Cohen (1988); Stanley (2004), pp. 127ff. ただし、内在主義者であるコーエンは BIV ではないという信念を「内在的に合理的な信念(intrinsically rational belief)」と呼び、真正の懐疑論者を論駁しようと試みてはいる)。また、本節での我々の議論と似たような理由から、クラインやコーンプリスも(EC)を使った懐疑論解決に否定的な態度をとっている(Klein (2000); Kornblith (2000)を見よ)。

44 Goldman (1980), p. 47.

45 この「傾向」は厄介な語である。ゴールドマンは、現実の長期的な頻発と(現実世界に比較的近い可能世界で起こるような)反事実的な帰結を区別し、両者を「傾向」の意味として認めている(Goldman (1979), p. 11 を見よ)。後者の考えは、本稿で度々登場していた(関連する)代替可能性という発想に非常に近いが、その考えとプロセス信頼性主義自体は独立している点に注意せよ。

46 Hill (1999), p. 125 を参考にした。ただし、提唱者であるゴールドマン自身は、信頼性主義を懐疑論解決に用いることについてあまり多くを語っていない。

47 DeRose (1995) を見よ。

48 注 2 を見よ。

49 この二つの選択肢はそれほど違いがないかもしれない。というのも、ゴールドマンのプロセス信頼性主義によれば、「正当化されることは、しばしば個人的な認知的プロセスの歴史(history)の問題」(Goldman (2012), p. 73)とみなされ、内在主義における「正当化」とはその意味が異なっている可能性があるからである。つまり、特定の外在主義をとると、伝統的な意味での「正当化」を知識の必要条件から排除することを意味しうる。

参考文献

- Annis, D. (1978), "A Contextualist Theory of Epistemic Justification", *American Philosophical Quarterly* 15, 213-19.
- Bach, K. (2005), "The Emperor's New 'Knows'", in G. Preyer and G. Peter (eds.), *Contextualism in Philosophy: Knowledge, Meaning, and Truth*, Oxford: Clarendon Press.
- Cohen, S. (1988), "How to Be a Fallibilist", in J. E. Tomberlin (ed.), *Philosophical Perspectives 2: Epistemology*, Oxford: Blackwell.
- (1998), "Contextualist Solutions to Epistemological Problems: Scepticism, Gettier, and the Lottery", *Australasian Journal of Philosophy* 76, 289-306.
- (1999), "Contextualism, Skepticism, and the Structure of Reasons", J. E. Tomberlin (ed.), *Philosophical Perspectives 13: Epistemology*, Atascadero (CA): Ridgeview.
- (2000), "Contextualism and Skepticism", *Philosophical Issues* 10, 94-109.
- Davis, W. A. (2005), "Contextualist Theories of Knowledge", *Acta Analytica*, 20, 29-42.
- DeRose, K. (1992), "Contextualism and Knowledge Attributions", *Philosophy and Phenomenological Research* 52, 913-29.
- (1999), "Solving the Skeptical Problem", in K. DeRose and T. A. Warfield (eds.), *Skepticism: A Contemporary Reader*, New York: Oxford University Press.
- (2004), "The Problem with Subject-Sensitive Invariantism", *Philosophy and Phenomenological Research* 68, 346-50.
- (2009a), "Introduction", in DeRose (2009d). Revision of DeRose (1992).
- (2009b), "The Ordinary Language Basis for Contextualism", in DeRose (2009d).
- (2009c), "Now You Know It, Now You Don't: Intellectualism, Contextualism, and Subject-Sensitive Invariantism", in DeRose (2009d).

- (2009d), *The Case for Contextualism: Knowledge, Skepticism, and Context*, vol. I, Oxford: Clarendon Press.
- Dretske, F. (1970), “Epistemic Operators”, *Journal of Philosophy* 67, 1007-23.
- (1991), “Knowledge: Sanford and Cohen”, in B. P. McLaughlin (ed.), *Dretske and His Critics*, Oxford: Blackwell.
- (2004), “Externalism and Modest Contextualism”, *Erkenntnis* 61, 173-86.
- (2005), “Is Knowledge Closed Under Known Entailment?: The Case against Closure”, in M. Steup and E. Sosa (eds.), *Contemporary Debates in Epistemology*, Malden (MA): Blackwell.
- Fantl, J. and McGrath, M. (2007), “On Pragmatic Encroachment in Epistemology”, *Philosophy and Phenomenological Research* 75, 558-89.
- (2009), *Knowledge in an Uncertain World*, Oxford: Oxford University Press.
- Feldman, R. (2004), “Comments on DeRose’s ‘Single Scoreboard Semantics’”, *Philosophical Studies* 119, 23-33.
- Goldman, A. I. (1979), “What Is Justified True Belief?”, in G. S. Pappas (ed.), *Justification and Knowledge*, Dordrecht: D. Reidel.
- (1980), “The Internalist Conception of Justification”, *Midwestern Studies in Philosophy* 5, 27-51.
- (2012), “Reliabilism”, in his *Reliabilism and Contemporary Epistemology: Essays*, New York: Oxford University Press.
- Hawthorne, J. (2004), *Knowledge and Lotteries*, Oxford: Clarendon Press.
- Hill, C. S. (1999), “Process Reliabilism and Cartesian Scepticism”, in K. DeRose and T. A. Warfield (eds.), *Skepticism: A Contemporary Reader*, New York: Oxford University Press.
- Klein, P. D. (2000), “Contextualism and the Real Nature of Academic Skepticism”, *Philosophical Issues* 10, 108-16.
- Komblith, H. (2000), “The Contextualist Evasion of Epistemology”, *Philosophical Issues* 10, 24-32.
- Lewis, D. (1996), “Elusive Knowledge”, *Australasian Journal of Philosophy* 74, 549-67.
- MacFarlane, J. (2009), “Nonindexical Contextualism”, *Synthese* 166, 231-50.
- Moore, G. E. (1939), “Proof of an External World”, in his *Philosophical Papers*, London: Allen & Unwin, 1959.
- (1942), “A Reply to My Critics”, in P. A. Schilpp (ed.), *The Philosophy of G. E. Moore*, Evanston (IL): Northwestern University Press.
- (1959), “Certainty”, in his *Philosophical Papers*, London: Allen & Unwin.
- Neta, R. (2002), “S Knows That P”, *Noûs* 36, 663-81.
- (2007), “Anti-Intellectualism and the Knowledge-Action Principle”, *Philosophy and Phenomenological Research* 75, 180-87.
- Nozick, R. (1981), *Philosophical Explanations*, Cambridge (MA): Harvard University Press.
- Putnam, H. (1981), “Brains in a Vat”, in his *Reason, Truth, and History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (邦訳 パトナム, H. 「水槽の中の脳」、『理性・真理・歴史: 内在的實在論の展開』、野本和幸 ほか訳、法政大学出版局、一九九四年)
- 柴田正良 (2012) 「記憶喪失と世界喪失: 水槽脳になったばかりの人が持つ記憶は元の世界を指示できるか?」、『金沢大学 哲学・人間学論叢』3号、17-26頁。
- Stanley, J. (2005), *Knowledge and Practical Interests*, Oxford: Oxford University Press.
- Unger, P. (1975), *Ignorance: A Case for Scepticism*, Oxford: Oxford University Press.
- Yourgrau, P. (1983), “Knowledge and Relevant Alternatives”, *Synthese* 55, 175-90.